

	三	
	斗	
	小	
	屋	
	に	
	て	
山		
口		
櫃		
久		



紅葉の明るい山を想像していたのに、あいにく大峠越えは、けぶるような秋雨の中だった。会津田島から乗ったタクシーに峠への道なるべく奥まで入ってもらい、雨具に身をかためて、連れの仲間とたがいにそれとなく元気をつけるような話をかわしながら歩きだしたのだが、うっとりしい気持ちは弾みようもなかった。

大きな石ばかりがごろごろした大峠では、雨がいつそう冷たかった。戊辰戦争で会津討伐のために官軍が越えたというこの峠は、そんな血なまぐさい歴史の跡を偲ばせるように、どれも首の欠けた石地蔵たちが無情な雨に打たれていた。

峠から三斗小屋温泉までの山みちも、こまかいのぼりくだりが多くて、地図で想像するよりも時間がかかった。三本目の沢を渡り、尾根を回りこむように越えて、見憶えのある煙草屋旅館の前に立ったときは、雨のしみたような体を早く温泉につけて温めたかった。

去年の四月に、那須連峰を甲子山まで縦走しようと、風のすさまじい峰ノ茶屋を越えてここに来たときも、この煙草屋旅館に泊った。山にはあちこちにまだ雪がたっぷ

り残っていて、野天風呂につかるのにも、雪の中に踏まれた小みちを行かねばならなかった。

最近では、どんな山奥にも自動車みちが遠慮もなく延びていて、車でかんとんに行けるような温泉が多いが、那須の山ふところにあるこの三斗小屋温泉は、どこから入るにしても山みちを歩かなくてはならない。泊り客はだからほとんどが登山者で、宿もこの煙草屋のほかは大黒屋という一軒しかない。

今はもう廃滅した下の三斗小屋宿で、煙草屋兼宿屋を営んでいたことから煙草屋と名づけられたこの旅館の主人は、赤い円顔の気さくなおばさんで、話させればいろいろとおもしろい話をきかせてくれる。会津の里からここに嫁にきた当時は、この温泉宿は癩病や梅毒患者の湯治場だったと、旅館の宣伝にはふさわしくないようなことまで語ってくれる。

長逗留の病客たちは、温泉につかる以外にやることがないので、暇つぶしに花札でばくちばかりやっていた。あるとき、おばさんが里の実家に行ったところ、山奥の宿

に嫁がせた娘をふびんに思っていた親が、千円という大金をくれた。その七百円を子供のために使って、残りの三百円を千円にしようと、誘われてばくちに加わったら、イカサマでみんな取られてしまった。そんな話までする。

三斗小屋宿は戊辰戦争のとき官軍に焼かれてしまったそうだから、大峠の首無し地蔵たちも官軍のしわざだろうか、と訊ねると、お地藏さんの首を盗むのはばくち打ちだと、おばさんは断言する。お地藏さんの首は縁起がいいと、ばくち打ちたちは信じてるのだそうだ。

本当かどうかは知らないが、むかしの三百円のうらみがあるのか、おばさんのこの首泥棒の話は妙に説得的なりアリティがあった。そして一見なにこともないような静かな山の中にも、そんな人間くさい劇があるのを私はおもしろいと思った。

あしたは山に登らず、下の谷筋の三斗小屋宿の跡を訪ねて、麦飯坂を沼ッ原にのぼり、ふもとの板室温泉にくだる予定だ。お天気がよくなるかどうかは、はっきりしない。山みちには熊が出るという、怖いような、うれしいような注意もでている。どんな

あしたになるかは分からないが、ことしの秋の終りの山みちを、ゆっくり静かに味わいながら歩いてみよう。